

トルコ共和国の高等学校用国定歴史教科書における「イスラム史」の記述

指導教官：林佳世子

南・西アジア課程トルコ語学科

寺尾陽啓

学籍番号 8500179

目次

はじめに

第1章 歴史教科書に関する基本的知識

- 1) 教科書研究
- 2) 現行の歴史教科書
- 3) 国定歴史教科書における「イスラム史」について
 - a) 「イスラム史」の全体像
 - b) 「イスラム史」の目次

第2章 「イスラム史」の記述

- 1) 「イスラム史」における記述の割合
- 2) 内容分析
 - a) 「イスラムの誕生期における世界の基本的政治状況」の分析
 - b) 「イスラム文明構築における他の文明の影響」の分析
 - c) 「イスラム文明の他文明への影響」の分析
 - d) 「前イスラム時代のアラブ」の分析
 - e) 「ムハンマドの時代」の分析
 - f) 「イスラム学問」の分析

第3章 結論

おわりに

参照

トルコ共和国の高等学校用歴史教科書第1巻4章「イスラム史と文明(13世紀まで)」、訳・寺尾陽啓

はじめに

トルコ共和国は建国以来、イスラムとの関わりによって政治が左右されてきたと言える。建国後の一党支配の時代の後、様々な政党が登場した。その数ある政党の中でイスラムの教えを主張し、事実上世俗主義を否定していると言える党も存在した。そしてそれらは決して小さな勢力ではなかった。1980年の軍事クーデタは、国内の政治不安の払拭や民主主義を確立させるといった目的の他に、そのような党を共和国から消すために行われたという一面もある。というのも、アタテュルク主義を堅持する軍部にとっては、イスラム的価値を強調した思想は共和国の否定に行き着くと思われたからであった。クーデタは成功したように思われたが、イスラム的価値、つまりイスラム的道德などを前面に主張する政党は存在し、80年代以降むしろその力は強くなったと言える。そしてその流れが衰えることは無く、現在のトルコ共和国ではイスラム色の強い中道右派の政党が政権を握っている。

60年クーデタから現在まで、特に80年代を通じて、トルコ共和国ではイスラム主義が高揚した。当時のイスラム主義の高揚を象徴していると思われるのは、セルジユク朝史の権威イブラヒム・カフェスオール(1914~84)の説いた「トルコ イスラム総合論」であると言える。カフェスオールはイスタンブール大学文学部歴史学科およびトルコ語トルコ文学科に所属する民族主義的教官たちを中心に、1970年に設立された「知識人の炉辺」の初代会長でもあった。元来「知識人の炉辺」は、「イスラム」よりも「トルコ民族」を強調する色彩が強かった。しかし、カフェスオールの理論に象徴されるように、彼らの議論の中で「トルコ民族」が「トルコ語を話すムスリム」と置き換えられ、「トルコ民族」あるいはトルコ・ナショナリズムを支える重要な柱としてのイスラムが、同時に強調されてゆくことになったのである¹。このような動きによって、イスラムとの屈折した関係に悩み不安定なアイデンティティを抱えていたトルコ人が以後進むべき道が用意されたのだった。そして、80年代にはモスクの建設ラッシュとでも呼べる状況が生まれ、「導師・説教師養成学校」も数多く設置された。同養成学校の卒業生は大学入学資格を持っていたので、宗教者としての敬虔さに重きを置く学生が増加し、彼らは卒業後に様々な分野で指導的地位に就き始めた。それにともなって宗教的出版物の数も以前に比べ急増し、事業の資金源も実業家などの支えもあり、しっかりと確立されていった。このようにイスラム主義は、人材、財政の基盤を手に入れ、発展を続けた。

本稿では、イスラム主義が高揚していく中で、トルコ共和国が公教育としてイスラムの歴史をどのように教えてきたのかを、高等学校用国定歴史教科書の「イスラム史」の章を分析することによって少しでも解明したい。現在、歴史教科書は全3巻から成り立っており、イスラム史の章は第1巻(195頁)の第4章(66~92頁)である。トルコ共和国における公教育の「主たる教材」である国定教科書でどのようなイスラム史観が述べられているのか

¹ 新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001年 p.292

を分析することは、トルコ共和国の現代史への、従来とは違った角度からのアプローチになると考えたからである。本稿における分析では、1980年の軍事クーデタ以前とクーデタ以後に発行された2つの教科書を用い、主に2000年版を中心に分析を進めている。使用した教科書は、どちらも国民教育省により発行された高等学校教育用国定歴史教科書であり、発行年はそれぞれ1978年と2000年である。1980年クーデタを、分析に使用した2つの教科書の境界としたのは、同クーデタがトルコ共和国とイスラムの関わりに大きく影響した事件の1つだからである。

本稿において国定教科書という素材に着目した第一の理由は、国定教科書の学習はトルコ共和国の次代を担う若年層の「共通体験」であり、トルコ社会の変動を理解するために不可欠であると考えたからであった。第二に、国語、社会などの人文系教科書には、政治や社会の変化が最も強く反映されているからである。

中東イスラム圏の教科書研究に関しては既に膨大な蓄積がある。近年では桜井啓子氏の『革命イランの教科書メディア』（岩波書店、1999年）があり、素晴らしい成果が上げられている。また、トルコ共和国の歴史教科書研究に関しては、永田雄三氏による高等歴史教科書の和訳『世界の教科書＝歴史』（ほるぷ出版、1980年）、尾高晋己氏による中学社会の和訳『世界の歴史教科書シリーズ23、トルコ - その人々の歴史』（帝国書院、1981年）などがある。こういった研究の蓄積はあるが、しかしながら現段階では、トルコ共和国の国定教科書の内容を対象とした研究がまだ成果が十分に上げていないこともまた事実である。この点においても、本稿において分析した内容は有効性が認められるのではないかと思われる。

第1章 歴史教科書に関する基本的知識

1) 教科書研究

教科書研究という分野では既に膨大な蓄積がある。桜井啓子氏によると教科書研究の主要な対象は大きく(1)教科書、(2)教科書制度、(3)教科書の影響力の3つに分類できる。実際の研究は、いくつかの領域にまたがっている場合が多い。そして氏は上の分類の4番目として、国際的な視野から見た教科書出版をめぐる諸問題、特に先進国と途上国間の南北問題や国際機関による途上国支援の問題などを加えている²。

教科書研究の対象として分けられた3つの分類の内、もっとも一般的なものが、第一の教科書の内容に関する研究である。本稿もこの研究方法に当てはまるとされる。教科書の内容の分析にも様々なスタイルがある。歴史的な変遷を扱ったもの、教科書の中の特定の項目を対象とする項目別内容分析、諸外国の教科書を相互に比較する国際比較研究、教

² 桜井啓子『革命イランの教科書メディア』 岩波書店, 1999年 p.14

科書知識のイデオロギー性の解明を目的とする研究、教科書の記述からその社会の価値体系や心情体系に接近しようとするものなどが代表的なスタイルといえる。

2) 現行の歴史教科書

トルコ共和国では、教科書はまず、国民教育省と教育協会という 2 つの機関によって目次が設定される。そしてこの 2 つの機関の許可が下りて初めて印刷される仕組みになっている。そして国民教育省によって 3 年に 1 度、検定を受けることになっており、その検定意見に従って訂正されることになっている。つまり、検定を担う委員会は、教科書の内容の変更や訂正を要求する権限をもっているのである。しかし、著作者が訂正要求に応じたくない場合、その反対理由を申し出ることができる。しかしながら、国定歴史教科書の編者の一人ニヤズィ・アクシト氏によると、国民教育省がときとして講義要目を変更することがあり、それにしたがって変更と再編を行うことはあったが、内容の変更や訂正を要求されるような事態に直面したことはなかったという³。とはいうものの、国定歴史教科書が、国民教育省によるイデオロギーが散りばめられているといったような批判にさらされてきた一面もある。そして、現行の国定歴史教科書は国民教育省によって何度か講義要目の変更されており、イスラム史の目次は 1983 年に改定された。

永田雄三氏の研究によって明らかにされていることだが、各時代の構成は、あくまでもトルコ民族の世界史上における役割を明らかにすることに焦点を据えて組み立てられており、ユーラシア大陸におけるトルコ民族と、西アジア、とりわけ現トルコ共和国の位置するアナトリアの歴史を 2 本の柱としている⁴。古代のオリエント史やヨーロッパ史にあてられた記述も決して少なくはないが、それはあくまでも一般教養として与えられているに過ぎない。西ヨーロッパや古典ギリシア・ローマを中心に組み立てられた日本の世界史教科書とはこれらの点でおおいに異なるといえる。

3) 国定歴史教科書における「イスラム史」について

a) 「イスラム史」の全体像

トルコ民族は西暦 9 世紀以降、中央アジアのトルコ系民族などからイスラム化し始めた。そしてカラハン朝、セルジューク朝などから、オスマン朝というトルコ - ムスリム政権が現在のトルコ共和国建設までに存在した。全 3 巻(第 3 巻は共和国史)からなる高等教育用国定歴史教科書の第 1 巻の中盤(カラハン朝~セルジューク朝)から第 2 巻(オスマン朝史)は、日本の歴史教科書で言うイスラム史の大方に当たり、イスラム史という枠組みに含まれる歴史と

³ 『世界の教科書 = 歴史、トルコ』ホルブ出版、1981、編訳・永田雄三、p.3

⁴ 永田雄三,op.cit, p4

いえる。そして、教科書全体がトルコ民族に焦点を据えて組み立てられていることは先ほど述べた。これらを踏まえると、教科書全体の記述内容がイスラムに触れる機会が必然的に多くなっていることが分かる。さらに、教科書における「イスラム史」が、(2)で述べた国定歴史教科書の基本的な組み立てに対して例外的であることも分かる。イスラム史の章が例外的であるといえるのは、そこで取り上げられている内容が、トルコ民族が主人公でないイスラムの歴史だからである。これに関しては下に示したイスラム史の目次や付録の和訳などを見れば明らかなことである。以上のことから、イスラムの誕生からトルコ - イスラム政権が誕生するまでのイスラム史が教科書でどのように扱われているのかを、本稿では分析していくことになる。

b) 「イスラム史」の目次

下に記したのは、改定前(1978年版)、そして改定後(2000年版)のイスラム史の目次である。

改定前の目次

イスラム史

前イスラム時代のアラブ

アラビア半島の地理的状況/ヒジャーズ/前イスラム時代のアラブの生活と宗教

ムハンマドとイスラム教

ムハンマドの生涯/啓示と預言者ムハンマド/イスラム教の原理、「コーラン」/預言者の言葉(ハディース)から/入信の呼びかけ/聖遷(ヒジュラ)/預言者の軍事活動/バドルの戦い(627年)/ウフドの戦い(625年)/ハンダク(塹壕)の戦い/小巡礼とフダイビヤの盟約(628年)/ハイバル遠征(629年)/メッカの占領/ターイフおよびタブーク遠征/預言者の晩年

正統カリフ時代(632~661)

アブー・バクル(632~634)/対イラン・ビザンツ遠征/『コーラン』の結集/ウマル(633~644)/シリア征服/エジプト征服/ウスマーン(644~656)イスラム教徒間における内戦/アリー(656~661)/ラクダの戦い/スッフィーン(657)の戦い/アリーの暗殺

ウマイヤ朝(661~750)

ムアウィヤ(661~680)/カルバラ事件/アブド・アルマリク(685~705)/ビザンツとの戦い/北アフリカおよびスペインの征服/トゥール・ポワティエ間の戦い(732年)/トルコ・アラブ関係/ウマイヤ朝滅亡の要因/ウマイヤ朝の滅亡

アッバース朝(750~1258)

ハールーン・アッラシードとその後裔/アッバース朝とビザンツとの抗争/トルコ族のイスラム化/アッバース帝国の分裂/アッバース朝の末期と滅亡

後ウマイヤ朝(756~1031)

アブド・アルラーフマン 3世とハカム 2世の時代/後ウマイヤ朝の最後/スペインの君

候国/イスラム教徒のスペインからの駆逐

イスラム文明

国家組織/軍隊/社会生活/言語と文学/思想/イスラムの学問/実践的な学問(外来の学問)農業・手工業・商業/美術

改定後の目次

イスラム史と文明(13世紀まで)

A. イスラムの誕生期における世界の基本的な状態

1. アジア

a) 政治の状態

b) 宗教と信仰

2. ヨーロッパ

a) 政治の状態

b) 宗教と信仰

B. イスラムの誕生と広まり

1. イスラム以前のアラビア半島

a) 政治の状態

b) 宗教と信仰

c) 社会と経済

d) 言語と文芸

2. 聖ムハンマド、4代カリフ、ウマイヤ朝、
アッバース朝、各時代におけるイスラムの広まり

3. イスラム文明の基礎

4. イスラム文明構築における他の文明の影響

5. イスラム文明

a) 政府の方向性

b) 宗教と信仰

c) 社会と経済

d) 文書、言語と文芸

e) 学問と芸術

6. イスラム文明から他の文明への影響

改定前と改定後の目次を比べると、改定後の目次の構成の方がやや整然としている。そして2つの目次において大きく異なる点が見られる。それは、改定後の目次において「A. イスラムの誕生期における世界の基本的な状態」「6. イスラム文明から他の文明への影響」

が追加されていることである。そこで言及されている内容は後の章で触れるが、改定後のイスラム史では改定前に比べ、イスラムの文明を学生に意識させる機会が増えたということが分かる。

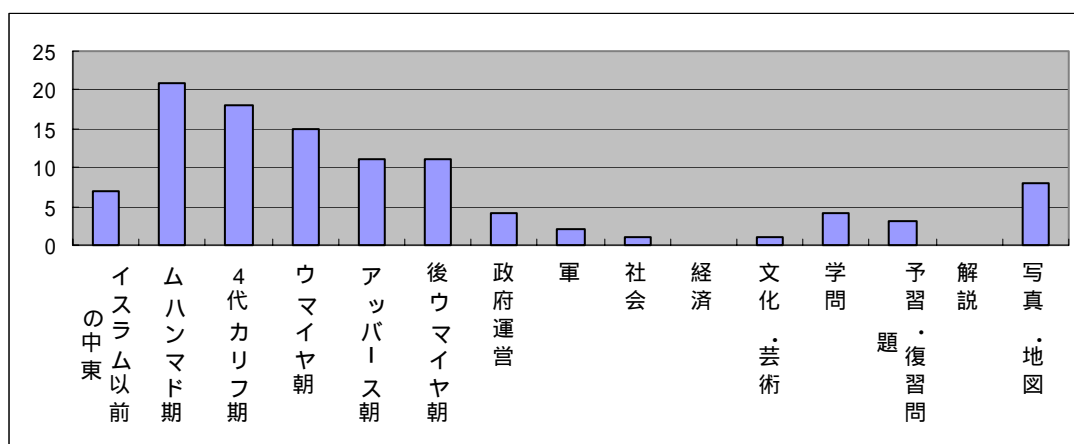
イスラム史の目次について変更がされた背景には、「トルコの子供たちに民族精神と理念を与え、慣習についての改善を行う、人民文化を紹介する内容を加えなければならない。ゆえに、宗教、文学歴史、地理、言語、道徳などのカリキュラムをトルコ - イスラム総合論へ適した形で(歴史教科書)発展させて整えなければならないだろう。」⁵という思想に影響を受けた国民教育省の存在があった。トルコ - イスラム総合論は、1980年の軍事クーデタ以後、左翼の排除に力を入れる將軍達に採り入れられており、イスラム史の目次改定がなされた1983年時に、第一党であったトゥルグット・オザルの母国党にも採用されていた。改定によって、イスラム史の章にもそういった思想が反映されているのだろうか。

以上のことを念頭に、次章のイスラム史に関する考察を進めていく。

第2章 「イスラム史の章」の記述

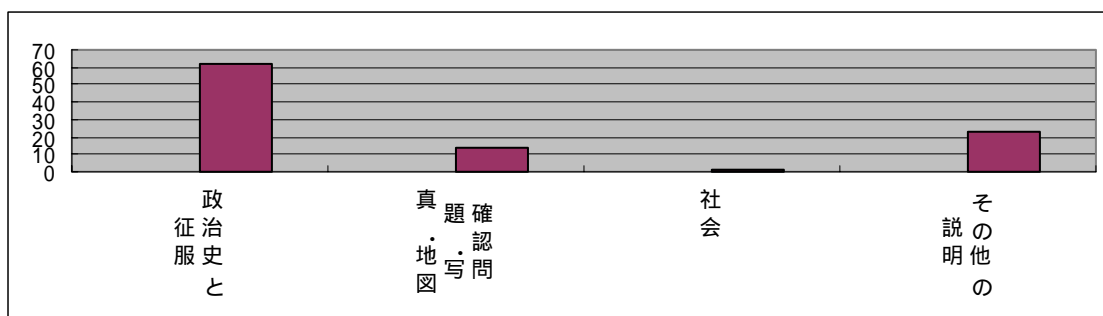
1) 「イスラム史の章」における記述の割合

第1章で紹介した1978年度版の「イスラム史の章」の目次を見ると、この章で説明されている内容は分かりやすい。記述内容を分類すると、社会史、征服活動、そして軍組織の大きく3つとなる。さらに記述内容を大まかではあるが割合で示すと、イスラム以前の中東7%、ムハンマド期21%、4代カリフ期18%、ウマイヤ朝15%、アッパース時代11%、後ウマイヤ朝5%、政府運営4%、軍2%、社会1%、経済0%、文化芸術1、学問4%、予習・復習問題3%、解説0%、写真・地図8%となっている(それぞれの占めるページ数、行から算出)。



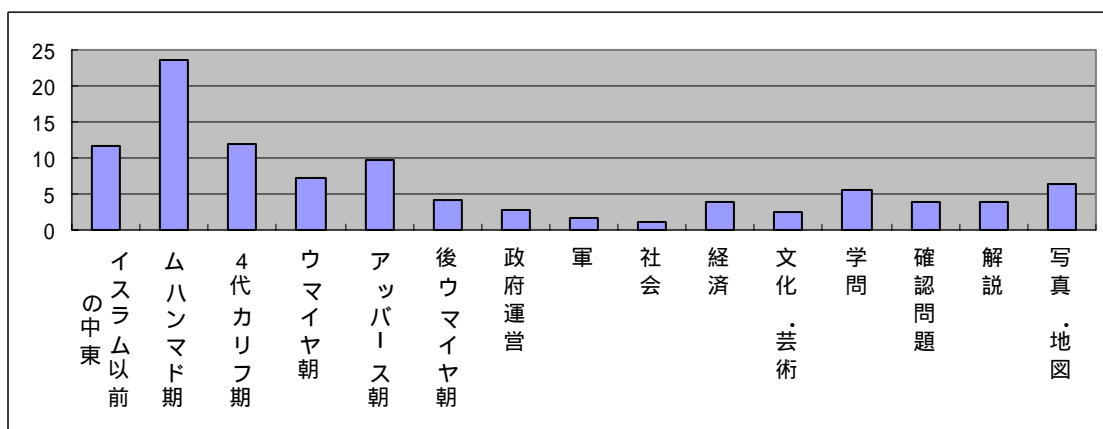
⁵ Abdullah Nişancı, Milli Eğitim Meselelerimiz, İstanbul, 1981, Yetkin p169

これを、さらに大まかに分類してみると次の図のようになる。



このように、歴史教科書におけるイスラム史の章に関して分類してみると、政治史と征服に偏っており、社会に関する記述がほとんどないことが分かる。ここで言う社会とは、社会構造、民族の生活、などを指している。

次に 2000 年度版のイスラム史の記述内容を先ほどと同様に割合で示すと、イスラム以前の中東 11.7%、ムハンマド期 23.5%、4 代カリフ期 12%、ウマイヤ朝 7.3%、アッパース時代 9.6%、後ウマイヤ朝 4.2%、政府運営 2.7%、軍 1.7%、社会 1.0%、経済 4.0%、文化芸術 2.5%、学問 5.5%、評価の問い 4.0%、解説 4.0%、写真・地図 6.3%となっている⁶。



イスラム史の記述内容を上のように割合で表示すると、それぞれの割合は、改定前も改定後もそれ程変わらない。記述内容そのものについてこの時点ではまだ明らかではないが、改定前・改定後のイスラム史においては共に各話題に対する重きの置き方はあまり変化していないということが分かる。そこで次に、記述内容についての分析を進めていきたい。

⁶ Sabri Yetkin, "Lise Tarihi Kitaplarında İslam", 'Tarih Öğretimi ve Ders Kitapları, 1994 buca sempozyumu', Tarih Vakfı Yurt Yayınları, 1995, p172

2) 内容分析

先に述べたイスラム史の改定後、記述内容において改定前と改定後の間にどのような変化があったのか。主な相違点として前に触れたが、改定後のイスラム史では「イスラムの誕生期における世界の基本的な状態」、「イスラム文明構築における他の文明の影響」、「イスラム文明による他の文明への影響」が追加されている。まずは、目次において追加された3つの内容をそれぞれ分析したい。また、正当カリフ時代からアッバース朝までの記述は特に変化したところは見られないので、分析の対象から外した。

a) 「イスラムの誕生期における世界の基本的政治状況」の分析

このテーマは具体的なイスラム史を勉強する前に、基礎知識のような形で教科書では位置付けられている。イスラムの誕生前後の時代において、アラブ以外の世界はどのような状況だったのかを知ることによって、イスラムの世界での最初の位置づけがなされている。そこで取り上げられている話題は以下のとおりである。

アジア

a) 政治状況

ビザンツ帝国、ササン朝、中央アジアのトルコ系民族、インド、中国、日本

b) 宗教と信仰

ビザンツ帝国、ササン朝、中央アジアのトルコ系民族、インド、中国、日本

ヨーロッパ

a) 政治状況

b) 宗教と信仰

アフリカ

それぞれについての教科書の説明はわずか数行で片付けられており、それらの説明からは文字通り基本的な世界の状況を掴むことができる。以下に、ビザンツ帝国とササン朝の説明を引用する。

a) 政治状況

ビザンツ帝国

イスラムの誕生期において、すぐ東にあった政府の一つがビザンツ帝国だった。ローマ帝国が二分されてから(395年)東ローマ帝国(ビザンツ帝国)という名前で始まった東側の国で、ヨーロッパにも領土はあったが「東側の政府」として繁栄した。5世紀に「民族大移動」の結果、西ローマは崩壊した。(476年)

東ローマ帝国は、バルカン半島においてアヴァール人と彼らに関係のあるウスラー

ヴ族、東はササン朝が隣接していた。

イスラムの誕生期において（7世紀初め）ビザンツ帝国は、内部情勢が悪化していた。戦争をしては敗北が続いた。610年にビザンツ帝国の指導者の地位は、ヘラクレイオスの手に渡った。

ササン朝

イスラムの誕生期において、イランでは、ササン朝が存在した。お互いにライバルだったササン朝と東ローマの間では闘争が繰り返され、3世紀近くも続いた。イスラムの誕生期においては、ササン朝の政治は混乱していた。

（2000年度版 66頁）

b)宗教と信仰

ビザンツ帝国

ビザンツ人たちは、ギリシャ正教を信仰していた。その中心はイスタンブルだった。イスタンブルはギリシャ正教の本山だった。さらに、ビザンツ帝国において、三位一体論派と言われたキリスト教の異端が存在した。例えば、シリア教会アルメニア教会、アベシニア教会 とエジプト教会という宗派がキリスト教には存在した。

ササン朝

イスラムの誕生期においてアラビアの、北と北東に存在したササン朝（226年～650年）は、アナトリア、シリア、パレスチナ、エジプトとアゼルバイジャンにおいてビザンツ帝国と政治闘争を繰り返していた。この闘争で、ビザンツ帝国がキリスト教異端宗派を禁止していた政策は、ササン朝の政策によって緩和された。ササン朝はこれを利用してしばしばビザンツ帝国の領土を侵食した。

（2000年度版 67頁）

イスラム史を学ぶ上で、アラビア半島に隣接していたビザンツ帝国、ササン朝などの巨国家についての知識は非常に重要なものであるが、その説明が少なすぎるのではないかと思われる。勿論イスラム史の章以外でビザンツ帝国、ササン朝については説明がされているのだが、その情報量は概して少ない。

b) 「イスラム文明構築における他の文明の影響」についての分析

このテーマの下で説明されている内容は古典ギリシャの影響、古典インドの影響、イランの影響の3つである。このセクションは次のように始められている。

ムスリムは短期間のうちに征服した土地に元々住んでいた人々と、元々存在した文明を利用して自らコミットしながら、独特のイスラム文化と学問を発展させた。このよう

に、世界の文明を発展させることに貢献した。学問と思想も発展させ、ムスリムはトルコ、古代ギリシャ、インド、イランそしてその他の文明を利用した。

(2000 年度版、87 頁)

イスラム文明構築における他文明からの影響を説明する書き出しなのだが、ここではムスリムが積極的に他の文明を利用しながら独自の文化を発展させていったとされている。具体的にどのような文化を発展させていったのかというところが、この書き出しに続いて説明されている。

古典ギリシャの影響については、3つの説明がされている。第1に、ウマルの時代にギリシャ文明圏が征服下に入ったこと。第2にハールーンアッラシードの時代にギリシャの文書がバグダッドに集められたこと。そして最もおおい割合を占めるのは、3つめのアッバース朝のカリフメンヌンの時代に、多くのギリシャ文書がアラビア語に翻訳されたことについてである。インド、イランによる影響については、短くはあるが、簡単な説明がされている。

e) 「イスラム文明から他の文明への影響」の分析

このセクションの全文は次のようになっている。

6. イスラム文明による他の文明への影響

イスラム文明は多くの地方へ影響を与えた。そして、その影響はヨーロッパにおいて最も顕著に見られる。

ヨーロッパは、スペインが占領された後、イスラム文化が非常に発達する土地となっていた。イスラム政権下のスペインは、本来のイスラムの国々であったかのように、高等な文化が発達した。同じように12世紀、後ウマイヤ朝における高等なイスラム文化は、スペインからヨーロッパへと知られるようになっていった。スペインにおけるトレドとシチリア島は、学問と文化の中心地となった。そこでは、人類共通の文化と文明が評価した基本的な知である多くの書物が、アラビア語からラテン語へ翻訳され、ヨーロッパに広まっていった。後ウマイヤ朝においてイスラム学問を学んだヨーロッパ人の学生は、母国へその知識を持ち帰った。このように、医学、数学、哲学、歴史学、化学のような分野の知識がヨーロッパへと持ち込まれた。十字軍遠征によっても東と西が、互いがもっと近いものであるということが知られるようになった。

このように、イスラム文明は、ヨーロッパの発展に大きく影響したのである。15世紀と16世紀には、ヨーロッパで始まったルネサンス運動の下準備となった。ルネサンス運動はヨーロッパ文明の環境をも改善した。

(2000 年度版、92~93 頁)

テーマからは一見、イスラム文明が様々な文明に影響を与えたことが説明されているように予想してしまう。しかし、その内容はイスラム文明がヨーロッパ文明に影響を与えたということが説明されているだけである。ヨーロッパへの影響だけが言及されていることに対しては少し物足りないセクションだともいえるが、イデオロギー的な記述が目につくというわけでもない。本章の1)でイスラム史の記述内容の割合を図で示したことで明らかにしていることだが、イスラム史の章では文化や文明に関する記述が少ないということもここでも確認することができると思われる。

以上が、「イスラム史の章」の目次が改定された後に追加された部分の分析であった。次に、その他の章について1978年度版と2000年度版の内容を比較、分析していきたい。

d) 「前イスラム時代のアラブ」の分析

次に「前イスラム時代のアラブ」が、改定後と改定前のイスラム史の章でどのようにかかれているかを比較したい。

アラビア半島の地理的状況を説明している部分はどちらも変わらないが、1978年度版は前イスラム時代のアラビア半島における王朝(マーン王国、サバー王国、ヒムヤル王国、ナバテア王国)が詳しく説明されている。

2つの教科書の主な相違点と呼べる箇所は、アラビア人に関する記述である。1978年度版では次のような描写がされている。

「前イスラム時代のアラブは、部族生活を営み、遊牧(バダヴィー)に従っていた。部族の間には血の復讐に由来し、終わることを知らぬ闘争が起こった。部族は、しばしば他部族を攻撃し、その財産や家畜の群れを略奪した。ときには1頭のラクダを巡って部族間に大きな対立が起こることもあった。戦いでは足手まといになる女子供を生き埋めにしてしまうような悪習もあった。アラブはきわめて不潔であった。ナツメヤシの枝で作った小屋に住み、ラクダや馬、羊、山羊のような動物を飼って暮らしをたてていた。アラブの部族には、それぞれに決まった領分があった。そこへ助けを求めて入ったものは、部族の保護を受け、敵に引き渡されることは無かった。アラブ人は、きわめて客好きで、約束はたがえなかった。

(1978年度版教科書、『世界の教科書』222頁)

2000年度版ではこのように、1978年度版のように「アラブは～だ」というような、まとまった説明はないが、所々でアラブ人に関する似たような説明がされている。

アラビア半島は、アラブ人もいたがセム系の故郷である。ここで生きたアラブ人は、

南アラブと北アラブという二つの起源に分かれている。

南アラブ人たちは、イエメン人であり、一般的には定住して暮らしている。農業と商業を行っている。

北アラブ人は、大多数が遊牧民族だった。これらのなかには都市に定住する者もいた。

北と南のアラブ人は、同じときに、様々な理由からそれぞれに相対しては離れ、イスラム教の誕生以降長期間にわたってそれらは繰り返された。

(2000 年度版 70 頁)

遊牧民の女性は、都市で暮らしていた女性より自由な身だった。しかし、男女平等という訳ではなかった。イスラム以前の定住あるいは移動していたアラビア人社会では男が重要なものとされ、多くの女性と結婚することができた。しかし女性は、結婚する男性を選ぶことと、夫婦関係がうまくいかなかったとき離婚する権利を有していた。男は好きなときに妻を離縁させることができたし、復縁することもできた。女性は、しかしながら、子供を産んだとき、亭主の家族として認めなければならなかった。一族で、男の子供がとても大切だった。女子を産んだ女性は罪深い者とされた。ときどき女子の子供は殺された。女性には相続権はなかった。

(2000 年度版 73 頁)

それぞれのアラブ人に関する説明の仕方は違っても、内容自体は変わっていない。2000 年度版では女性に関する記述が加えられている。この、前イスラム時代の女性に関しては、イスラム史研究においてしばしば議論に取り上げられている。

無明時代⁷と呼ばれる前イスラム時代のアラビア半島に関する研究は既に膨大な蓄積がある。教科書中の無明時代の説明や、無明時代という呼称自体などに対して、様々な批判もある。無明時代の女性に関する話題はそういった議論の中で触れられることが多かった。本稿では無明時代の呼称問題に関しては触れないが、教科書の内容をより深く理解するために、どのような議論がなされていたのかを確認したい。

無明時代を説明した教科書の文章に関して Sabri Yetkin 氏は次の 3 点を批判している。

- 1, 「無明」という表現で始まるこの章は、イスラムへの高まりを美化するため、人類の歴史の一部を中傷し、蔑んでいる。
- 2, 歴史教科書において説明されているアラビア半島はイスラムの誕生まで、重要な場所として数えられていない。このことは頭から学生にイスラム以前のアラビア半島を(価値の)無いものと思わせ、イスラムに対して動機付ける働きをしている。

⁷ 「(無明時代とは) 文字通り学識のないという意味を指すのだが、この言葉は、アラブ人が、読み書きができない野蛮な人種だったと言うことを指しているのではない。この呼び名は、その時代においてアラブ社会の『アッラーの啓示を受けた預言者と、あの書物の法(コーラン)に目覚めていなかったことを知らずに生きていた時代』ということの意味するために用いられていたのだ。」(2000 年度版、73 頁)

3, 無明時代と名付けられたイスラム以前の時代は、無知・野蛮・売春・姦通、女性の権利がなかったこと、女子が生き埋めにされていた慣習があったこと、奴隷制が広まった時代だと紹介されている⁸。

つまり、Yetkin 氏は教科書が説明している内容が非常に悪質なものであり、学生に悪い先入観を与えるものであると言っている。Yetkin 氏が批判する内容は以下の部分であると思われる。

「部族は、しばしば他部族を攻撃し、その財産や家畜の群れを略奪した。ときには1頭のラクダを巡って部族間に大きな対立が起こることもあった。戦いでは足手まといになる女子供を生き埋めにしてしまうような悪習もあった。アラブはきわめて不潔であった。」

(1978 年度版教科書、『世界の教科書』222 頁)

男は好きなときに妻を離縁させることができたし、復縁することもできた。女性は、しかしながら、子供を産んだとき、亭主の家族として認めなければならなかった。一族で、男の子供がとても大切だった。女子を産んだ女性は罪深い者とされた。ときどき女子の子供は殺された。女性には相続権はなかった。

(2000 年度版 73 頁)

Yetkin 氏が言うように、確かに教科書の記述にはそういった印象を受けるところがあるが、2000 年度版の教科書では氏が批判する内容と少し違ったところがある。

遊牧民の女性は、都市で暮らしていた女性より自由な身だった。しかし、男女平等という訳ではなかった。イスラム以前の定住あるいは遊牧生活を送っていたアラビア人社会では男が重要なものとされ、多くの女性と結婚することができた。しかし女性は、結婚する男性を選ぶことと、夫婦関係がうまくいかなかったとき離婚する権利を有していた。」

(2000 年度版 73 頁)

1978 年度版の教科書では、Yetkin 氏が批判しているような記述しかないが、2000 年度版の教科書は必ずしも Yetkin 氏が言うような道徳心のかけらも無い時代であったことだけが説明されているわけではなかった。

また、無明時代の説明の為に教科書が割いている割合は小さく、説明されている内容は、上で触れた内容の他に、種族によって構成されていたこと、使用されていた言語、詩につ

⁸ Sabri Yetkin, op.cit.

いての記述がある。説明の不足が誤解を与えている、といった見方もできる。

Yetkin 氏が「イスラムへの高まりを美化する為に人類の歴史の一部を中傷し、蔑んで性格付けている」と批判した思想は、元来イスラム布教のために用いられた方法であった。

しかし 20 世紀後半、中世イスラムの歴史編者が信じて疑わなかった当時の歴史観や思想を、高校歴史教科書を編集する際に「含有」させてしまった研究者たちが現れたと Yetkin 氏は言っている。つまり、中世の歴史観がそのまま現在でも利用されているということだ。

『歴史教育と教科書』の中で Yetkin 氏は次のような教科書の記述例を挙げている。

「女子を生き埋めにした野蛮な社会は（イスラム教化することによって）上流の人間としての評価を受けるようになった。」⁹

「女性に関しては、イスラムまではアラブ女性はまったく哀れなものだった。小さな一つの権利でさえなかった。一族の中でまだ結婚していないときから女性へ男性が話しかけるような振る舞いができた。ときどき、住民の中で女性の方が多きとき、一族が飢饉にあえば女の子は殺された。女性の権利は全くない。男性に話しかけられ、ただ働きをする人として捉えられた。アラブでは女性の離婚権・相続権はなかった」¹⁰

「人々の間では平等などなく、奴隷は額に焼き判を押され、男女の区別なしに奴隷市場で売られた。」¹¹

Yetkin 氏はこれらの歴史観が教科書に反映しているから、学生にはアラブ社会に対する悪印象を与えてしまうだけだと言っている。確かに、上の引用からはアラブ社会は、人権が無視され、学識がなかった時代だったという印象が与えられているといえる。Yetkin 氏がこうもこの問題に関して強く主張する理由は、「そもそもの欠陥として、少女が生き埋めにされたということすら疑わしい」という議論があるからである。Yetkin 氏もそのような主張をしており、「アラビア半島でイスラム教が誕生したときからではなく、確かな社会共同体が存在していたイスラム以前から、大規模で多くの影響を他の文化に与えていた事実を、そしてその後のムスリムの時代をわが国だけではなく周辺の国々にも、我々研究者が詳らかに説明する必要性が将来訪れる」と主張している。氏の言うように、アラビア半島がイスラム以前から他の文化に影響を与えるほどの文化を持っていたことが既に膨大な研究の蓄積の結果明らかにされている。7 世紀後半のムスリムが、イスラム以前のアラビア半島の文化を否定はしていなかったことも分かっている。むしろこの時代をアラブ史の「黄金期」、そして独特な美徳が最も活動的に発展した時代として彼らは見ていたようだ¹²。ア

⁹ Haki Durusun Yıldız vd, *Tarih 1*, İstanbul, 1990, p.202-203

¹⁰ Ahmet Mumcu *Tarih 1 Liseler İçin*, İstanbul, 1990, p.131, Yetkin op.cit.174

¹¹ Selahattin, Dikmen-Kemal Koçak, *Tarih Lise 1*, Ankara, 1991, p.200-201, Yetkin op.cit.174

¹² Claude Cahen, *İslamiyet*, (Çev. Esat Nermi Erendor), İstanbul, 1990, p.13

ラブ女性に関して言えば、実際ムハンマドの妻ハティージェは大隊商を経営するほどの富豪であったし、Salma bint-I amr や Binti Amru al-Haris などの有名な女流詩人もいる。彼女たちに人権が一切認められていなかったならば、彼女たちの偉業はどのように達成されたのか説明がつかない。

このセクションについては Sabri Yetkin 氏以外にも様々な議論がされているのだが、本稿では以上のように歴史教科書の無明時代の説明について確認した。

e) 「ムハンマドの時代」の分析

第 2 章の 1) の表を見ても明らかなことだが、ムハンマドの時代の説明はイスラム史の章で最も多く割かれている。このセクションでは大きく、征服史とムハンマドに関する記述の 2 つについて述べられている。説明のほとんどは征服史であり、征服史の内容において特に変更された記述はない(付録参照)。まずは 1978 年度版と 2000 年度版の間での変更点について触れたい。このセクションでは基本的には征服史とムハンマドについての説明の 2 つに分けられることは確認したが、1978 年度版ではこの他にコーラン、ハディースからの抜粋が載せられている。

『コーラン』は次のように始まる。

「全世界の主、保護と慈悲の主、審判の日の主たるアッラーをおいてたたえるべきものはなし。主よ！私達はあなたにのみ祈りを捧げ、あなたからのみ助けを受けます。私たちを、あなたの怒りに触れ、道を誤った者たちの道ではなく、あなたが恵みを与えられたものたちの道たる正しき道に導きたまえ」

『コーラン』からの抜粋

「アッラーは、汝が共同体と統治とに関する、また政治上の職務を信徒に与えること、かつ信徒の中にあって公正な統治をすることを命じる」

「アッラーは、何ものかにたとえられることを許さない」

「秤りを用いるときには、平衡を保て」

「われらは、人類を荣誉あるものとして創造した。人類を海や陸に配置した。清浄なものからなる糧を与えた。人類をわれらの創造物の最高位に位置せしめた」

(1978 年度版教科書、『世界の教科書』、224 頁)

預言者の言葉(ハディース)から

「宗教は叡智である。叡智亡き者に宗教は無い」

「知識は宝庫、その鍵は解いてある」

「その日のうちになすべきことは、他日に持ち越すことなかれ」

「暮らしを支えるために働く職人を神は愛される」

「アッラーは、聖法が合法と認めたことの中でも、妻の離縁は好まれない」
「賄賂の授受者と仲介者と共に神の呪いあれ」
「指揮官の取る贈物は違法、婦人の賄賂の受諾は、神の冒瀆にも等しい罪である」
「無知なる者の罪は、知恵あるものの罪に倍する。何となれば、無知は、それだけでひとつの罪であるから」
「病気にかかったら治療を続けよ。なぜならば、アッラーは、不治の病は与えなかったのだから」
(1978年度版教科書、『世界の教科書』224頁)

上の内容は、イスラム教の6つの原則と5つの行が説明された後に引用されている。1978年度版ではこのように、イスラム教について詳しい説明がされている。2000年度版では、イスラムの教えに関する記述はなく、削除されている。また、同じく1978年度版ではアッラーに関する説明が以下のようにされていた。

アッラーは、だれにも見えず、聞こえず、また感知されない。しかし、アッラーは全知全能である。天使を介して人間を制御する。現世で善行をなした者は、神の恩寵を受けて死後天国へ行き、そこで快適な生活を送る。悪行をなした者、罪を犯した者は、地獄に投げ込まれ、責めさいなまれる。
(1978年度版教科書、『世界の教科書』223頁)

以上のように、1978年度版の記述を見ると、2000年度版は改定によって宗教色の強い記述が削除されたことが分かる。

ムハンマドに関する記述

イスラム教の始祖であるムハンマドが教科書ではどのように描かれているのだろうか。付録の和訳部分を参照してもらえば分かるのだが、2000年度版の教科書では、ムハンマドに関しては聖人として特別に扱われてはならず、宗教的に意味を持つような描写はされていない。ムハンマドは歴史上の一人物として紹介されている。2000年度版と1978年度版の間でも、大きな変化はない。しかし1978年度版に見られる特徴としては、やや残虐的な表現が所々ある。以下にあげるのは教科書で記述されているムハンマドの発言部分である。

ムハンマドも、いまや『多神教徒(偶像崇拜者)は、遭遇しだい、これを殺害せよ』と支持していた。
(1978年度版教科書、『世界の教科書』225頁)

改訂版では上のような残虐な表現は出てこない。このような表現があるものの、それほ

ど頻繁にあるわけではない。それらはムハンマドの残虐性を示すために書かれているというわけではないので、問題を含んでいるとはいえない。2000年度版では上のような記述はなく、全体的に柔らかい表現がされるようになっている(付録参照)。

f) 「イスラム学問」の分析

イスラム史で説明されているイスラム学問については、日本の教科書のスタイルとあまり変わらない。著名人の名前と業績が列挙されている。

「イスラム学問」の説明のスタイルについての批判で次のようなものがある

「理解するためではなく、暗記することにイスラム学問の重きを置き、過去における貴重な知を過去のままで十分だと言っているかのようだ。そのことは、将来の世代の発展にブレーキをかけようとしているようなものだ。」¹³

日本の教科書の場合、学生が受験勉強しやすいようにそのようなスタイルが採用されているという一面があると思われるのだが、トルコ共和国の教科書も同じような一面があるのだろうか。このことに関しては、長い議論となってしまうのでここでは論及できない。しかし、仮に著名人の名前と業績の陳列というスタイルを捨て、イスラム学問に関して詳しい説明を加えるとするならば、教科書はかなり分厚くなってしまうものと思われる。歴史教科書はどの範囲まで説明するべきなのかという議論になってくる。

第3章 結論

以上のように、トルコ共和国国定歴史教科書のイスラム史の章で書かれている内容を、それぞれのセクションに関する批判などと共に分析した。

第1章で説明したことだが教科書におけるイスラム史とは、トルコ民族を中心に書かれている教科書中では、トルコ民族が主役ではないということはいわゆる例外的な章であった。内容についての分析の結果、トルコ民族が主役ではないからといって、特に杜撰に扱われている章であるとはいえず、1980年以降に高揚したトルコ-イスラム総合論が反映されているともいえなかった。

教科書とは、しばしば国家による思想統制の道具となりがちであるなどと、批判がされがちである。しかし本稿で分析してきた結果、トルコの国定歴史教科書では、イスラム史という狭い範囲ではあったが、特にイデオロギーが反映されていると思われる箇所は確認できなかった。

¹³ Orhan Koloğlu "İslam'da Değişim", İstanbul, 1993, p.152-153, Yetkin op.cit.189

おわりに

歴史教科書の本来の目的とは、地球上で起きた歴史的イベント・その原因・結果・他のイベントとの因果関係を、誰の主観からも解放し、学生に伝えることであるかもしれない。あるいは、国家が、将来的により国益を確保できるような人間を育てることであるかもしれない。筆者は歴史教科書の本来の目的が前者であってほしいと願う立場であるのだが、誰の主観からも解放された歴史観が存在することは不可能である。また、国家が国益を確保しようとするのは当然のことであり、国家の都合で歴史が語られることはあって然るべきことであると筆者は考えている。しかし、重要なことは、教科書がそうした背景を持っていると認識され、常に世の中から批判されている状態にあることではないだろうか。

本稿では、トルコの国定歴史教科書における「イスラム史」の記述を分析してきたわけだが、歴史教科書全体（トルコ共和国史を含め）から「イスラム史」を見るとまだまだ多くの分析が可能であるといえる。この点に関しては次の課題としたい。

参考文献

新井政美『トルコ近現代史』 みすず書房，2001年

桜井啓子『革命イランの教科書メディア』 岩波書店，1999年

『世界の教科書＝歴史、トルコ』 ホルプ出版，1981年，編訳・永田雄三

『トルコ その人々の歴史，全訳世界の歴史教科書シリーズ 23』 帝国書院，1981年，訳・尾高晋己

『イスラーム地域の民衆運動と民主化』東京大学出版会，2004年，私市正年・栗田禎子編

Tarih Öğretimi ve Ders Kitapları, 1994 buca sempozyumu, tarih vakfi yurt yayınları,
1995